

夜叉信仰の背景

高橋堯昭

一

羅什訳の法華經の「塔」とあるところを、サンスクリット本では、前半は舍利塔、法師品以後は法を収めた塔、即ちチャイトヤ堂と注意深く区別している。私はこの「法の塔」を求めて三十年ガンダーラを歩いて来たが、六・七世紀のギルギットのような、經典を中に収めた塔は見出せなかった。然しスワット地方奥地のニモグラムに四世紀のものと思われる仏・法・僧三宝の三つの塔が並立している遺跡に巡り合うことが出来た。中央の塔は普通の土饅頭形の塔だが、両側の法と僧の塔は基壇の上に建物が乗っていた基礎が残っている。従って、法の塔はチャイトヤ堂で、中に石の台があるから、經典をその上に安置したと想像しても、けっして不自然ではない。

私はここで思った。涅槃や高次の倫理的生活を求むべき僧院に、生天の利を求める仏塔が入り込み、そして莊嚴化さ

れ、更に「チャイトヤ堂」にまで発展する。そして、その修業方法も「法を觀ずる」立場から、「信」「折り」の立場に変わって行く原因が那邊にあるだろうか。

二

大般涅槃經の言葉をかりるまでもなく、舍利供養はバラモン居士の在家の人にかせられて来たのに、いつしか僧も目を向けて来た。

在家の居士の仏教も「出世間」を建前としながら、現実には現世の幸福を祈る二重性を持っていた。この「祈り」の傾向は出世間を求め、諦觀する立場の僧の中でも出て来た。即ち、法の理解に耐えられる資質の僧も居れば、悟らんとすればする程、悟りから程遠い自己を見出す僧もいた。こうした僧達は自然に仏塔崇拜に心をよせ、僧院と塔とが並立するようになって行った。

そもそも釈尊亡き後、舍利を収めた塔は、最初は単なる土

饅頭に過ぎなかった。然し時代を経て来ると、過去の記憶は美化されるという人情の機微から、墳墓は益々莊嚴化され、追憶記念のものから、塔自体が「超越者」の象徴として拜まれるようになった。従って僧達も無関心ではいられなくなり、サンチー大塔の奉獻銘に、あのように多数の僧尼の名前が残されるまでになって来た。

従って、ガンダーラの寺々の如く、僧院の傍に塔を建てざるを得ず、然もその塔は何重にも増巾を重ね、又何重にも基壇を重ね、あまつさえ塔身自体高くなり、そのスペースに仏像や彫刻がはめこまれて、僧院以上に莊嚴化されて来た。

例えば、タキシラのカラワンやギリで、僧院から一段と下った所に塔を建て、直接町から人々が参詣出来、然も僧院の生活を妨げないよう控え目に建てられていたものが、逆に増巾莊嚴され、ジャマールガリ・メハサンダ・タフト・イ・バリーのように塔や奉獻塔の群が僧院の上に出来、主客が顛倒するかの様相を呈する。

三

然らば、このように塔が莊嚴化され、「祈り」「信」の方向に進んで行くのは、どこに淵源するのであろうか。私はこれを古代インドの社会生活、そこから生れた樹神夜叉信仰に求めたい。

法華經の見宝塔品に、宝塔を開く際、十方の分身の諸仏を将来めしめる為、宝塔のまわりを整地、無数の樹々に夫々宝座を作ったとか、又チベットのタンガに、一本の樹の無数の枝の夫々に諸仏が坐し、又北魏等の彫刻に無数の枝の夫々に仏の坐するのがある。これらは樹が大地の生命力の表現として、不可思議な力をもつと考えられたからである。こうした考え方は遠くインドス文明に溯る。

即ちモエンジョダロの印章に、アシュバッタ樹の間に髪を長く垂らした裸の女が立ち、ハラッパーの印章に、枝垂れ柳の絵や、逆立ちした女の股から植物が繁茂しているものもある。

特にパールフット等の彫刻に、四角な石の台座上の太木に、猿や鹿が礼拝しているものや、象が二頭樹に向って礼拝灌頂する図、又、樹から手が出て釈尊を招き、お茶のポットやカップを持った手の出る彫刻がある。

こうした樹の彫刻の最大なのが、カルカッタ博にあるベスナガル出土の「劫樹」である。樹の下に置かれた壺から、溢れ出る穀物、そして、枝からぶら下った巾着等。樹が大地の生命力の表現として豊穰と如何に深くかわつていたが示されている。

この最も完成されたのが、パールフットやマトゥーラの樹に手足をからませ、枝をにぎった豊満な肉体をもつヤクシー像である。然もその女神の立つ台座が象や牛の頭で、魚の尾を

もつマカラであつたり、蓮華の花や樹のような茎にかこまれた像も多く、共に同じ意味をもっていたことがわかる。

四

こうした樹神夜叉崇拜の名残りがジャータカの中に沢山残されている。特に釈尊自身が「かつて樹神であつた時」という表現で。その樹の種類としては、(1)ニグロダが一番多く、(ジャータカ『以下J.』一九・三三三・四四五・四六五・四九三・五〇九・五三七)(2)菩提樹(J.五〇・四七九・五二七)(3)沙羅樹(J.七四・四一八・四六五)(4)蓖麻樹(J.一〇九・二九五)(5)ルチャ樹(J.一二二)(6)パラサ樹(J.三〇七)(7)綿樹(J.四二二)(8)菴羅樹(J.四七四)(9)多羅樹(J.四〇二)(10)鎮頭迦樹(J.五二〇)(11)紐婆樹(J.三一二)(12)「樹神」とあり名前が固定されないもの、(J.五五・一〇五・一一二・一三九・二〇五・二五七・三七〇・四一九・四七五)である。

このように樹の種類に区別がある。これを裏書きするように、サンチー大塔のトラーナの梁に、七本の樹や四本の樹と三つの塔で、夫々過去七仏を示す彫刻がある。夫々の樹は実に綿密に、その枝や葉の特徴がとらえられている。これはその属する種族が異つた樹を信仰していたことを示している。

孔雀王呪經の二百に近い別々の夜叉がそれぞれの町の守護神として信仰されていたという記事がこの別々の樹と対応す

る。従つて、夫々の種族が別々の樹を、そしてその樹の神、即ち夜叉を信仰していたことがわかる。

J.五三七に「樹神に願望の成就を感謝して、村を建設せ多くの家族を住わせた。村は大きくなって八万ばかりの商店が軒を並べた。彼の根本の枝のひろがる限りの土地は平らにして、その周囲は欄楯を作り、門や扉をつけた。その村は鬼が調伏されたことからカンマーサダンマ町という名が生じた」とあるから、樹神・夜叉が古代インド社会の中心であつたかがわかる。

私が樹の種類を一々列記したのは、前述の如く、これらの樹々が、恰もトーテム樹として信仰されていたことを示すためである。従つて祈願の種類や方法、特にそのお供え、即ち犠牲等が当然異つて来る。

即ち、願望としては、(1)男子娘等の子供名与財産諸願(J.五〇・一〇九・一九三・三〇七・五〇九・五三七)(2)旅行の安全(J.一九・二五七)(3)願ほどこ感謝(J.一一三・一二・四一九・五三七)等であるが、問題なのは、祈願のためのお供え、即ち犠牲である。(a)動物(山羊・羊・鶏・豚)(J.一八・一九・五〇・七七・一一三・三四七・三九八・四一八・四五九・四八一)(b)花香灯火植物(J.七七・一〇九・三〇七・五六五・四七九)(c)魚肉(J.一三・一四六)(d)乳酪飯米(J.一〇九・一四六)(e)人肉(J.三三三・三九八・五三七・五四六)(f)お金、千金に値いする

供物も含む（J.五〇九・五二〇・五二七）（g）讚歎供養（J.二二一・四一九・五三七）等である。

特に動物の犠牲が一番多い。仏教はこれを否定することを建前としながらも、J.四五九「水本生」の如く、地主の口をかりて、「動物の犠牲はお前達の習慣に従ってよい」との現実妥協をはからざるを得なかった程、仏教以前の社会では動物の犠牲が一般的であったと思われる。否、現在猶、依然として行われているから、むしろ仏教の方がインドでは特異な存在であつたかも知れない。

従つて、J.三五三の「樹のまわりに縁を作つて、五指の深さに血をため、千人の王の眼をえぐり、腹をさいて、甘い肉で樹の幹をまく」等の凄惨なものまであつて、当時の社会の状況が示されていると言えよう。

五

そもそも聖樹信仰は、その木の精たるヤクシー信仰に連なる。ここにユニークな像がマトゥーラ博に蔵されている。

表から見ると豊満な美しいヤクシーだが、裏は樹と蓮の花で聖樹と夜叉の表裏一体図である。恰もパールフットやマトゥーラで、樹をにぎっている女神像と規を一にする。いはば聖樹の持つ生命力そのものを、人格化したものの典型で、聖樹イコール夜叉の構図がそこに示されている。

更にジャータカでは、この聖樹の有様が、現在のストゥーパの状況そのままに描がれている。即ちJ.三〇五、バラーサ本生に「樹の根本を平らかにし、草を抜き、まわりに垣を結び、砂をまいて掃き清め、五指量の香を供養し、花環香薫香を供養し、灯火を点じて樹のまわりを右繞」とか、J.四七九迦陵説王菩提樹供養本生に「諸仏の勝座、大地の膺たる大菩提座を認め、王の「カリサ」ばかりの広さを限つて、兎の髪程の草も生えて居らず、銀の板のように真白く輝く砂が一面に撒かれてあつた。然もその周囲一面に雑草や蔓草や森に生える大樹などが生い茂つて、恰も菩提座を右繞するような形をし、且つ又菩提座の方向を向いていた」、又J.五〇・四七九・五三七等の記述によつてもその構造や右繞等礼拝方式もストゥーパと全く同じであることがわかる。

即ちかつてあつた樹神・夜叉信仰を踏襲して、釈尊の舍利を安置するストゥーパも、その供物も（仏教は不殺生を原則とするが）、礼拝様式も伝統に従つたものであることがわかる。

六

南伝の因縁物語に、「ウルベーラのセーナニーの資産者セーナニーの娘スジャータは、彼女の下女が釈尊を見て、樹神を見違つて知らせたので、仏陀なる樹神を供養した」とあるように、仏陀と樹神・夜叉との関係は深い。

特に仏伝から見ると、仏母マハーマヤはルンミディーという地母神の池で湯あみし、サーラ樹に祈って、枝に手をかけると釈尊が生れた。為に宮参りに夜叉にぬかずくと、夜叉の方が逆にひれ伏し、彼こそ「神の中の神」と言うたので、子供は「Devatī-Deva」と言われたとあり、又後年釈尊が菩提樹下で悟り、沙羅双樹の下で入滅したというのも、将た又バイシャリーで釈尊に奉げられた *Cāpala Caitya* や *Spatatittha Caitya* もバニヤンの樹神のいた所⁷。又入滅の沙羅双樹も、かつて夜叉の住んでいた所であったといわれている等々、釈尊と樹神・夜叉との関係は極めて深い。

J. 四九三に「舎衛城の商人達が商売に出かける時、仏に多くの布施をし、帰依と戒を守ることを約し、『大徳もし無病息災に帰したら、世尊の御足に礼拝します』と（出かけ）、旅行中に一樹神に……水や飲物……を恵ぐまれ、救われた上、財宝を得て無事に帰って来ると、香や花環を手にして尊師を敬って、翌日に大布施をし『その功徳を財宝を与えてくれた樹神に回向しよう』と功徳を回向した」とある。これはJ. 一九と同じく、釈尊が樹神夜叉と同一視されて来たことを意味している。

かくて、聖樹イコール夜叉、更にイコール釈尊となる。従って釈尊のストゥーパが容易に舍利塔の限界を超えて、大地の生命力、我々をしてかくあらしめる超越者となっていく。

七

かくて、仏塔はどんどん莊嚴化され、ガンダーラの山々を覆いつくすようになる。特にアフガニスタンのチャリカル郊外のトープダラ大塔の如く、塔の基壇が何重にもなり、それが仏菩薩の彫刻で莊嚴されるだけではなく、塔身自体にもベルト状に仏像が並び、その上の三葉の仏龕に、主仏を中心とした三尊仏が祀られるようになる。こうなると、単なる仏の舍利塔の域を超えて、十方の諸仏を収めたマンダラのようなものに意識は変わって行く。こうした傾向はカプール南方のグルーダラの仏塔、又タキシラのジャウリヤンやカニシカの夏の都カピシ周辺の寺の奉獻小塔でもうかがわれる。

然も仏塔が、かく莊嚴化されると同時に、チャイトヤ堂が作られて来る。一般には、未だはつきりと、「法」を収めたものまでには至らないが、仏塔や仏像を中に収めたものが多く出て来て、時代と共に多くなる。

これは八千頌般若経や法華経等に対応する。即ち前者に「供養さるべき、完全に悟った如来達の全知者性は知慧の完成から生じたもの。この知慧の完成を書物にし、安置し、花や旗灯明で恭敬し」とか、後者の「舍利を安んずるに及ばず、法を……」という立場に通ずる。法とは「縁起の総体」、我々をそこにあらしめている「超越的存在」である。

然もこのような超越的存在への対応は「信」である。原始小乗仏教の諦観・観想の立場から、「大いなるもの」に「祈り」「随順する」ことへの移行であった。

ジャータカの中では、これ程徹底した表現は見当らないが、それへの道程がジャータカの言葉の裏面によみとれるように思える。例えば、J.五〇六に「竜が、大道の傍の蟻塚の頂に立って、『私の皮等の欲しいものは、それらをとれ。私を芸する蛇にしようと欲するものは、それに与えよう』というて身体を無条件の施物として、身を投げ出して、とぐろを巻いて布薩会を守った。」とある。

ここに示されているのは、自己を捨てて、すべてに献げる「信」の道であり、犠牲から布施の行への飛躍である。然も、その布施の行のうちで、「人々のこの摩訶薩を信じて」という「信」こそ最上の供えものであるという重大事を示唆している。

然も、与えられるものは、人間の側からの求めではなく、超越者の側から御手を垂れる。J.一〇九に「貧しい男が駄菓子と一杯の水を供えたが、供えものが、余りにも貧しいので躊躇していると、『お前は思を知り、恵み深いものに供養したので』と、樹神の方から声をかけてくれ、樹の下之宝の瓶を掘り起させてくれた」とあり、又J.三〇七にも同じ表現がある。

これらには一見、見返りを求める「交換儀礼」の根跡が見られるが、「樹神の方から」手をさしのべている所が注目されねばならない。大乘で自覚的になる「仏の誓願」の萌芽をここに見る。

八

サンチーのトラーナに彫られた七仏道樹に、樹の特徴が細かく描がかれ、過去七仏のそれぞれを示し、且つ又その属する種族の樹を表わしていることは既に書いた。こうした種族では、生活は聖樹と一体であり、樹神夜叉の存在は彼等の生活全般にとって前提されている。ジャータカの中では、未だ交換儀礼のように描がかれては居るが、夫々の種族にとっては、それが生そのものの前提、種族社会にとって厳然たる事実である。彼等が生れる以前から、否彼等が生れるということとは、そうした大前提の上に生を享けるということである。従って、それへの「信」はすべてに優先される。

従って動物の犠牲を供えたから願望が成就したのではなく、願望の成就是「信」の結果に過ぎない。この点、我々現代人の信仰の立場から推し計ってはならない。

なぜなら、現代人の信仰は「今日は観音の寺、明日は鬼子母神の祠に願望成就」を祈る等、功利的な信仰が多い、これと違って彼等にとっては樹神・夜叉の存在、それへの信は生

存の大前提、否、すべてであった。前述の釈尊が生れるのに、マハーマーヤが聖樹の枝をにぎり、又宮参りに夜叉の祠に詣てたことがこれを示している。

九

かく、ストゥーパ信仰は樹神信仰の土壌の上に立っていた。為に仏舎利の塔は容易に大地の生命力の発現たる樹神・大地母神のように、超越者に発展して行った。従って、それは「法」の塔、即ち「縁起の総体、宇宙の理法」の塔に発展し、莊嚴化されると共に、又一方で「法」を収めたチャイトヤ堂に移り行く。こうしてギルギットの法を収めた塔になって行く。ニモグラムの仏法僧三宝の塔は、これへの過渡的なものであろう。

然して、塔をかく深化させて行った樹神・夜叉信仰の原動力は何であらうか。これはジャータカ四七九やマハーバンサに暗示されている。即ち、「大菩提樹」や「ストゥーパ」を建てる時には、その底中央に、「水を満たした金銀の壺が置かるべきである」といっているように、「水を中心とする」モンソーン・インドの風土に根ざす、大地の生命力大地母神への信仰であり、又これと共に生きた古代種族社会の生活そのものであった。然し、それに関しては次の発表の機会をまちたい。

大部分割愛

- 1 Marshall, Taxila III, plate 72, & plate 82
- 2 カルカタ博物館入口、ロビー中央に安置
- 3 Marshall, Monument of Sanchi, VII Pl. XXI, Pl. XV
- 4 シルクロード 仏美術教伝来の道、図録四四頁、奈良国立博物館

5 宮坂宥勝氏『仏教の起源』四二六頁

6 Lalita Vistara chap, VIII

7 Watters, on Yüanchang II 78, II 147

8 大乘仏典『八千頌般若經』一卷一〇一頁

9 岩波文庫『法華經・中』一五四頁

△キーワード▽ 樹神夜叉、仏塔、地母神

（身延山短大教授）

掲載されなかった諸氏の発表題目（四）

『声聞地』の出世間道 毛利俊英（龍谷大学） 聞・思・修の三慧について 向井亮（北海道武蔵野女子短大） いわゆる Dhātuvāda について 高崎直道（早稲田大学） prayakābhāsa をめぐって 神子上恵生（龍谷大学） rje-btsun Chos-kyi rgyal-mtshan の Sa-lian nam-gzhang について 高田順仁（大谷大学大学院） 吐蕃訳経史考 原田覚（東方学院） Bahyar-thasiddhikarika kt.59, 60 御牧克己（京都大学）